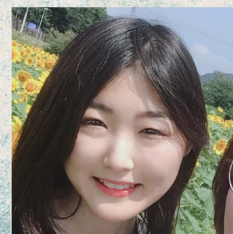
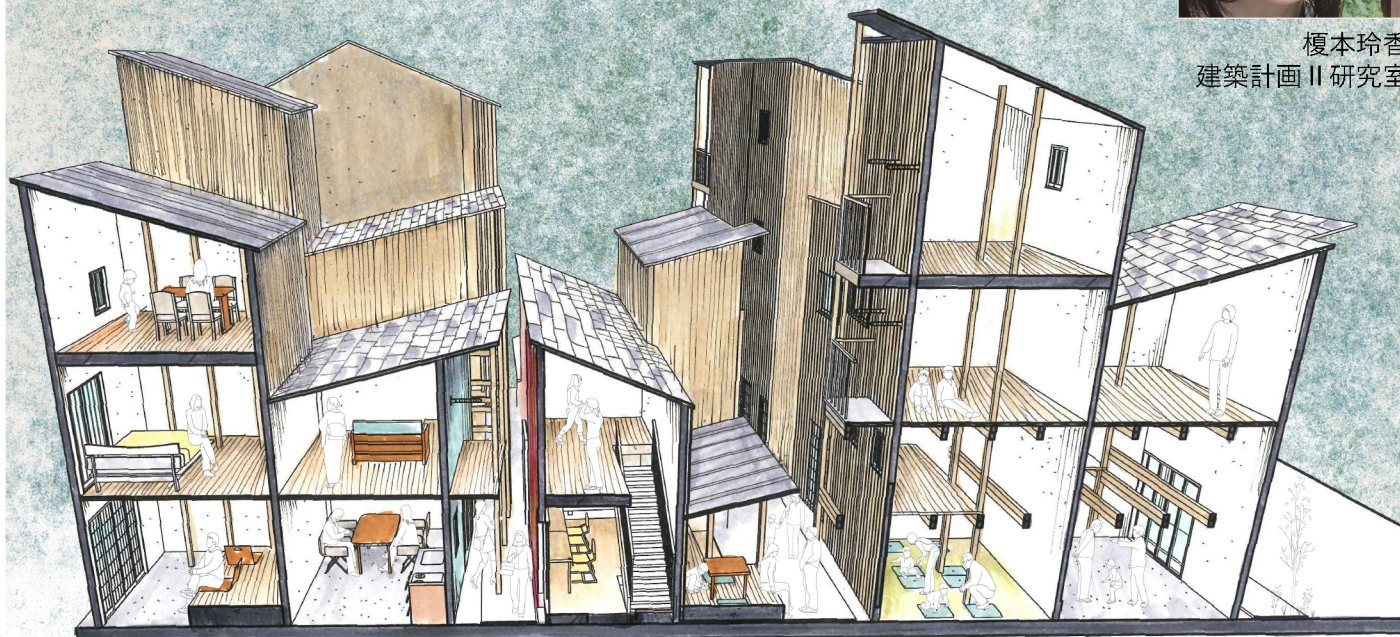


結える街

—もうひとつの佃島—



榎本玲香
建築計画II研究室



ヒアリング調査

実際に行政と住民両意見聞いてみて分かったこと

- ・建物の老朽化
- ・街区が狭く建て替えが出来ない
- ・引継ぎがうまくいかない
- ・景観は保存する気なし
- ・所得の格差
- ・外部との自然な接点がない
- ・元々借地が多かったため住み継がれていける住宅は少ない、そのため新たな住宅は立ち並び景観が壊れてきている

S59年調査 一部抜粋資料

町並みの保全

1) 伝統的外観の特徴

伝統的特徴	ある	ない	計
土地区	23	39	62
下地区	23	35	58
上地区	7	49	56
計	53	123	176

大半が喪失している。

2) 建築の質

建築の質	上	中	下	計
数	20	21	19	60
%	33	35	32	100

ほとんどが改造、改築されている。規模の小さい建物は構造材も継ぐ厨食が目立つ。そのため上質な家はそんざいする確率が高い。

3) 屋根葺き材

屋根葺き材	瓦	トタン	計
数	23	37	60
%	38	62	100

関東大震災により瓦は無くなり、トタンの普及に伴い半数以上がトタンになっている。

4) 外壁の仕上げ

外壁仕上げ	板張り	トタン	計
数	40	20	60
%	67	33	100

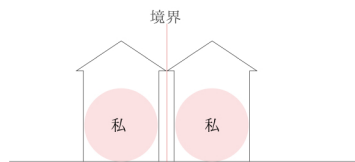
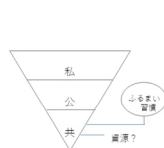
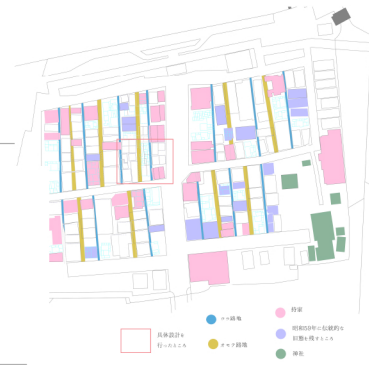
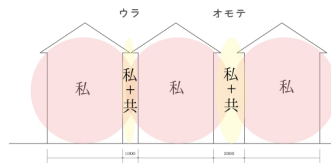
伝統的な見板張りは厨食によりなくなり、板張りの上に取り外してトタン張りになっている。伝統的な景観はない。

5) 土地・建物の所有状況

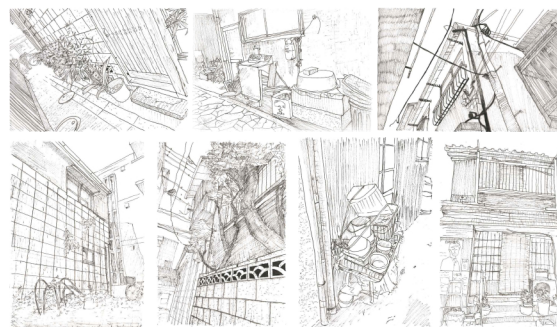
土地所有	持家	借家	計
数	13	47	60
%	22	78	100

建物所有	持家	借家	計
数	32	28	60
%	53	47	100

持家の目入が揃っている傾向にあり、まだに下層的な店子生活が生活していることを示している。



現代の路地の様子 ぐみや使わなくなったものなど生活の一部とは言い難い



□コンセプト

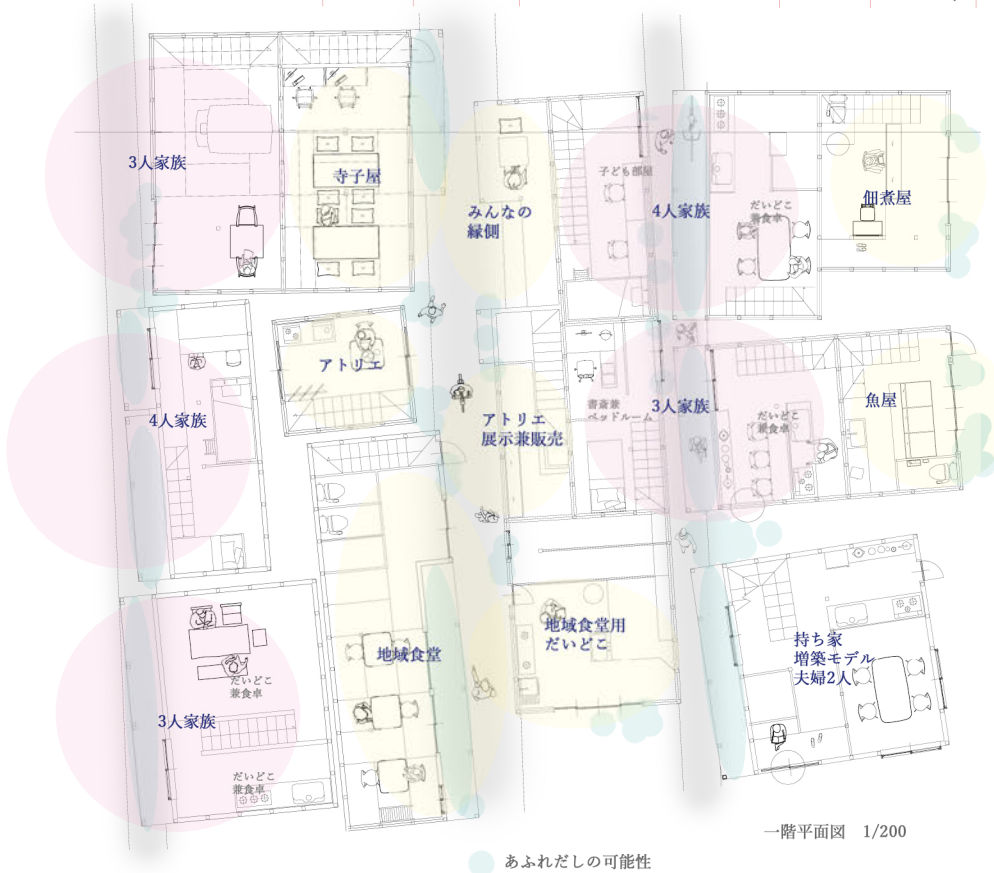
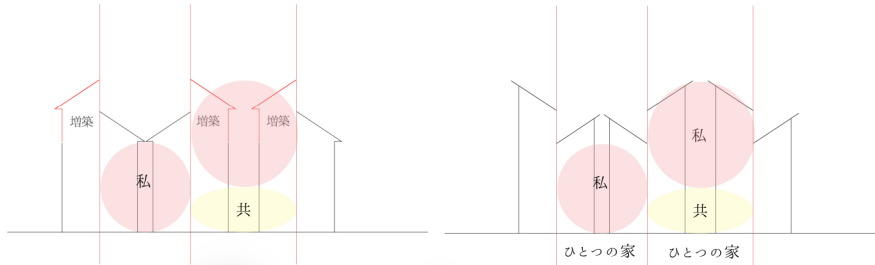
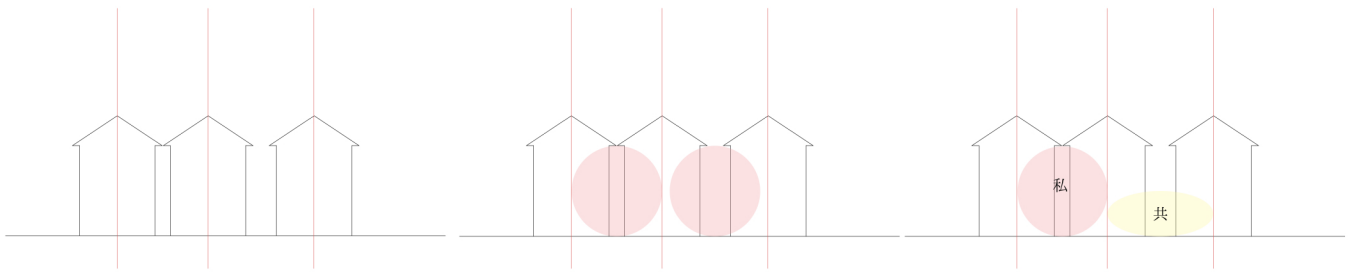
佃島の江戸から続く路地空間の考察をし、近代化による現代住戸とそれまでの暮らしの相違が路地にも表出する事を発見した。近代化により生活としての役割が宙に浮いてしまった路地空間を生活空間として保存、また景観や継承のそもそもの街としての問題とのリンクを図り、そういった問題が各大学の合同調査により可視化された昭和59年へ遡り、路地景観、文化の保存と更新を考えた。

□プログラム

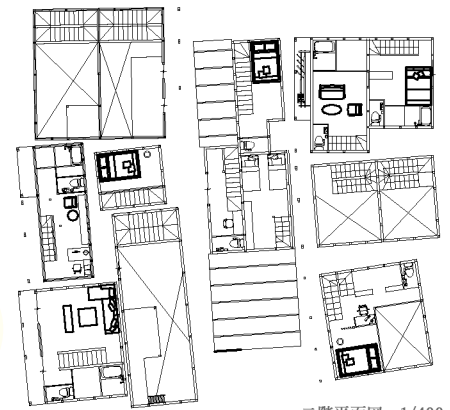
プログラムとしてはまず右上に記載されている色分けより色のない借家を対象として考えた。さらに隣ページの上に記載されているように建物を二つに割り、路地を挟んだ生活空間へ変えた。また、一階部分に対する「私」と「共」の機能の差別化を「ウラ」と「オモテ」で図った。増築部分については右下に記載されているような建物のそれぞれの築年数に合わせて複雑に像減築する。

□デザイン

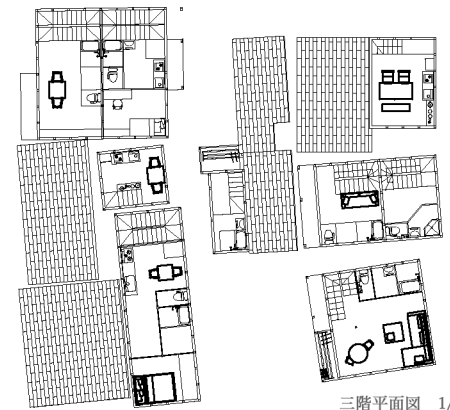
まず「路地を挟んだ一つの家」にみえるように屋根が敷地の構成のもなっている切妻屋根のように形を変えた。一階部分はそれまでの伝統的なつくりであって「おもてだどこ」の形態を伝承し基本的に土間続きのキッチンへ繋がるようになっていく。また、「オモテ」「ウラ」で差別化を図ろうと壁面のそれまでの伝統であった板張りや近代化への歩み寄りとしてトタンやサイディングを仕上げとして用いている。



一階平面図 1/200



二階平面図 1/400

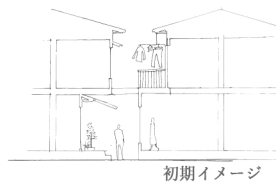


三階平面図 1/400

ウラ路地

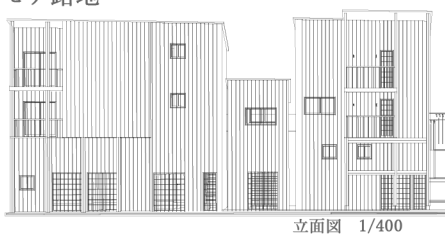


立面図 1/400

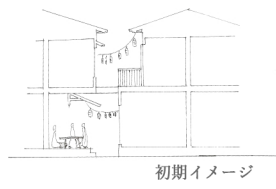


初期イメージ

オモテ路地



立面図 1/400



初期イメージ

